

## 第1章 権力についてのヒンドゥー至上主義 ——歴史修正主義と「文化の政治」——

佐藤 宏

### 要約：

インド政治はいま、モーディー政権、つまりは権力についてのヒンドゥー至上主義によって、新たな軌道に載せられつつある。従来の軌道の上での政権獲得ではなく、まったく新しい軌道へとインド政治を転換させる課題をモーディー政権はみずからに課している。その推進力が今日のヒンドゥー至上主義勢力を代表する民族奉仕団（RSS）であり、それを母体とする政党インド人民党（BJP）である。

これらヒンドゥー至上主義勢力は、「歴史修正主義」と「文化の政治」を両輪にして、インド国家そのものの改造に着手している。その行く先には、歴史や文化の修正、再解釈にとどまらず、ヒンドゥー至上主義に批判的な異論の排除、そのための統治機構の集権化へと、政治体制そのもの転換がまちうけている。

本稿はこうした見通しのうえでインド政治の将来を見極めようとするより大きな企画の序論であり、モーディー政権を駆動しているヒンドゥー至上主義の両輪である歴史修正主義と「文化の政治」に焦点を当てて、今後の研究の方向を定めることが狙いである。

### キーワード：

インド政治、モーディー政権、ヒンドゥー至上主義、民族奉仕団（RSS）、インド人民党（BJP）、文化ナショナリズム、歴史修正主義、文化の政治

「ヒンドゥー民族（ネーション）」という我々の概念は、単なる政治的、経済的権利の束ではない。それは基本的に文化的である。それは古来からの我々の崇高な価値観を生命の息吹としている。我々の民族生活に真のビジョンを与え、我々民族が直面しているあまたの問題を解決する努力に実のある方向性を与えるのは、我々の文化のひたすらなる再生のみである。

M. S. ゴールワルカル<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Golwalkar, M. S., “Call of our National Soul,” (Golwalkar 2000: 34)。本書の初版は1966年、

## はじめに

2014年5月のモーディー政権発足から3年と3か月が経過したのち、2017年8月に実施された大統領、副大統領選挙では、インド人民党（BJP）の推す民族奉仕団（RSS）出身政治家が選出された。これによって国家の最高ポストは正副大統領、首相、連邦下院議長、副大統領が務める連邦上院議長をふくめてすべてヒンドゥー至上主義団体であるRSS出身者が占めることになった<sup>2</sup>。直後2017年9月のRSS幹部会議で、RSS副幹事長(Sahsarkaryavah)のスレーシュ・ソーニ（Suresh Soni）は、「あらゆる運動は三つの段階を経る。無視、反対そして受容である。我々は最初のふたつの段階を経て、いまや受容の段階にいたっている」と語った<sup>3</sup>。RSS幹部が自らのメインストリーム化を誇らしげに語る状況が到来したのである。

こうしてインド政治はいま、モーディー政権、つまりは権力についてヒンドゥー至上主義によって、新たな軌道に載せられつつある。従来の軌道の上での政権獲得ではなく、まったく新しい軌道へとインド政治を転換させる課題をモーディー政権はみずからに課している。その推進力が、今日のインドでヒンドゥー至上主義の潮流を代表する民族奉仕団（RSS）と、それを母体とする政党としてのインド人民党（BJP）である<sup>4</sup>。

ヒンドゥー至上主義は、インドにおける宗教的多数派である「ヒンドゥー教徒」が一体不可分のものであるという前提の上に、「ヒンドゥー教徒」に国家の運営上優先的な地位を認める政治思想である。

いうまでもなく現実の社会には、彼らが想定するような、安定的な一枚岩の「ヒンドゥー教徒」社会が存在するわけではない。ヒンドゥー社会だけに着目しても、内部の亀裂(言語、カースト)、境界の不分明さ(シク教、仏教などの近縁宗教やトライブの存在)など、その一体性とは相いれない要素を多く抱えている。なによりもインド社会全体では、ヒンドゥー社会との間で歴史的に緊密で複雑な交流関係を抱えてきたイスラーム教徒(ムスリム)、キリスト教徒、ゾロアスター教徒(パルサー)など、無視しがたい人口と影響力をもつ宗教的なマイノリティが存在する。

こうした多元的社会のうえに多数派のヒンドゥー教徒が統治に対する優先権を主張するために、ヒンドゥー至上主義は独特の政治理念を展開する。その一つが歴史的な合理化、つまり歴史のヒンドゥー教徒中心的理解である。修正の射程はインダス文明に

---

参照したのは1996年の第3版のリプリント版である。ゴールワルカルは民族奉仕団（RSS）の第二代の最高指導者(Sarsanghachalak)である。

<sup>2</sup> 大統領の Ram Nath Kovind は RSS の団員というよりは支持者、シンパとみられる (Andersen and Damle 2018: 240)。

<sup>3</sup> *Indian Express* (以下 *IE*)、2 Sept. 2017。

<sup>4</sup> 現政権下の RSS と BJP の密接な協働関係は(佐藤 2019: 5-9)を参照されたい。

までさかのぼる遠大なものだが、さしあたり現代インド、特に独立後のインドに限ってみても、彼らによる歴史の修正は、ムスリムも含む幅広い国民の参加によって創られたインド国家という独立以来の政教分離主義的な理解への挑戦でもある。こうした歴史修正主義がヒンドゥー至上主義の第一の要素である。

第二に、ヒンドゥー教徒社会固有の宗教、文化、価値を現実政治のなかに持ちこみ、政治の目標に宗教施設の再建や屠殺（牛肉食）の禁止、さらには流入難民に対する宗教を基準とする市民権の付与に見られるようなマイノリティの文化や存在そのものに対する攻撃をあからさまに掲げるのが、ヒンドゥー至上主義の政治理念のもう一つの特徴である。のちにより詳細に検討するが、ヒンドゥー多数派の文化（ヒンドゥー文化）を政治にはばかることなく持ち込むという意味で、これを「文化の政治」と呼んでおこう。

モーディー政権の下で権力についてのヒンドゥー至上主義は、「歴史修正主義」と「文化の政治」を両輪にして、インド国家そのものの改造に着手している。その行く先は、歴史や文化の修正、再解釈にとどまらず、ヒンドゥー至上主義に批判的な異論の排除、そのための統治機構の集権化へと、政治体制そのもの一大転換へとつながってゆくのである。

本稿はこうした見通しに立って、インド政治の将来を見極めようとするより大きな企画の一部である。ここではまず、モーディー政権を駆動しているヒンドゥー至上主義の両輪である歴史修正主義と「文化の政治」に焦点を当てたい<sup>5</sup>。

## 第1節 文化ナショナリズム——ヒンドゥー至上主義の源流

いうまでもなく、今日の BJP の母体である RSS(1925年創設)が主導するヒンドゥー至上主義には独立前の源流がある。この流れは国民会議派が指導したナショナリズムを「領域ナショナリズム (Territorial Nationalism)」として非難する。インドを空間的領域としてのみ受け止め、宗教、文化の差異を問わず、ムスリムであろうと、キリスト教徒であろうと、領域内に生存するすべての個人や集団を「インド国民」として包含するのは過ちだと彼らはいふ。そしてインドをひとつの文化(sanskriti)と民族(rashtra)からなる単一不可分の固有の存在とみなす自らの立場を「文化ナショナリズム(Cultural Nationalism)」と規定したのである。

RSS の第二代最高指導者 M.S. ゴールワルカル (Golwalkar)による「領域ナショナリズム」批判の論考をあらためて読み直すと、半世紀前に書かれたこの文書に、モーディー

<sup>5</sup> 本論はその作業のいわば総論部分であり、具体的内容はこれに続く4本の論考で詳述される予定である。そのおおよその構想は本稿 pp. 23-24 を参照されたい。

政権下で見られる歴史修正主義と「文化の政治」そしてそれらが標的とするムスリムやキリスト教徒らの宗教的マイノリティへの根深い敵意が、余すことなく展開されていることに、ある種の感慨すら覚える<sup>6</sup>。

このような歴史的な系譜を引くがゆえに、ヒन्दゥー至上主義のモーディー政権は、会議派理念や、マルクス主義など「インドとは異質な」イデオロギーにもとづく彼らがみなす歴史解釈に大々的な攻撃を仕掛けているのである。この攻撃には、政治的意図が先行しているから、彼らが置き換えようとする歴史解釈には、随所に単純化、歪曲、意図的選択が働いている。問題は、ヒन्दゥー至上主義が権力の座についたことで、いっぽうでは連邦政府や一部州政府の公的な支援と協力のもとでの文化・教育活動への介入を通じ、他方では末端のヒन्दゥー至上主義団体や活動家によるあからさまな暴力のもとで、こうした歴史の修正が体系的に進められていることである。「文化ナショナリズム」に源流を求める今日のヒन्दゥー至上主義はなによりもまずは歴史修正主義としてたちあられざるを得ないのである。

## 第2節 ヒन्दゥー至上主義と歴史修正主義

### (1) 歴史修正主義としての「脱会議派インド」

モーディー政権とRSSによる歴史の修正と「文化の政治」は、彼らが統治の前面に躍り出るうえでの正統性を訴えると同時に、新たな歴史解釈と政治作法を国民に認知させ、同意させるためのイデオロギー操作でもある。認知や同意を求めるためには、複雑な議論は必要ない。単純で、択一的なスローガンを持ちだせばよいのである。それが2014年の連邦下院選挙でのBJPによる主要なスローガンの一つである、「脱会議派バーラト(インド)」(Congress-mukta Bharat)のスローガンである。

この「脱会議派インド」は当面の選挙やその後の政権運営のみでなく、インド政治のあらゆる側面において、国民会議派の存在と影響を抹消しようというスローガンである。それは単に政党としての会議派への抹消宣言にとどまらない。単に「会議派中心史観」への敵視にとどまらない。会議派が体現するとかれらがみなす基本的な政治理念、インドの社会観、国家像全体への攻撃である。攻撃の射程はナショナリズムの理解にまでおよぶ。

モーディー首相とBJPが「脱会議派」と並んでしきりに用いたのが「会議派支配の60

---

<sup>6</sup> とくに Golwalkar, "Territorial Nationalism 2 Its Fruits," (Golwalkar 2000: 139-150)を参照。ただし正確に言うと、彼自身はこの箇所「文化ナショナリズム」という表現を用いてはいない。BJPは1996年と1998年の選挙綱領の中で用いた(Noorani 2000: 101-2)および(Noorani 2002: 61)を参照。

年」という、独立後政治史をこのうえなく単純化したスローガンである。政権の支持層のなかには、モーディーの登場した2014年をもって「第二共和制」の発足などと位置づけるむきもある<sup>7</sup>。さしづめ2014年は「会議派支配の60年」、言い換えればネルー・ガンディー王朝に終止符を打った「モーディー朝」元年といったところだろう。

モーディー首相自身も、自身の登場を歴史上画期的なできごとと位置付けるために、歴史のより長い射程での大胆な修正にまで手をつけている。首相は就任後初の連邦議会での演説で、権力者に対する「奴隷根性(gulami ki mansikta)」の根源を1200年前まで遡らせたが、これは通常「英植民地下の200年」をインドの窮状の原因に帰する言い回しに対して、インドへのアラブ勢力の侵攻期にまで、問題の根源を遡らせようとする発想を反映している<sup>8</sup>。言外に意図するのは、自身の政権の登場が、ヒンドゥー教徒の歴史的解放という壮大な歴史上の一大事件であるという誇大な自信である。

「会議派支配の60年」に話を戻すと、独立後政治史の単純化は、おもむくところ自らの政権、あるいはモーディー首相個人の手放しの賞賛へと行きつく。モーディーが登場する以前の歴史は暗黒の歴史、絶望の歴史というわけである。2015年5月中旬、モーディー首相は中国、韓国、モンゴルの東アジア3国を訪問した。中国の上海では、在留インド人の聴衆に向かって、自らの政権の登場でインド人は誇りを取り戻したと豪語した<sup>9</sup>。ソウルの演説でも、「なんという国なんだ、もうやっとなん」と自国に絶望して去った在外インド人が、いまや自国に戻ろうとしていると、思い入れたっぷりに語った。さすがこれらの演説には批判も殺到し、#ModiInsultsIndiaのハッシュタグには2日間で

---

<sup>7</sup> “Opinion: Where honour is due,” *The Organiser*, 9 Nov. 2014. 以下、RSSの機関紙である *The Organiser* からの引用は電子版(<http://www.organiser.org/static/archive.aspx>)による。1947年から数えると2014年は67年後であるが、語呂の関係かこうした表現が用いられる。インドの総人口についてもモーディー首相は2018年になっても「12億5千万」という数字を好んで用いるが、これもヒンディー語での語呂(savā shat kror)が良いためだろう。2019年1月のラジオ講話で初めて13億(tera shat kror)と言い換えた。

<sup>8</sup> “1200 Years of Slavery,” *The Organiser*, 22 June 2014 (6月11日に行われた首相演説での発言とされるが、連邦下院議事録 <http://164.100.47.132/debatetext/16/I/1106.pdf> では、該当部分が見当たらない)。アフガニスタン、ガズナ朝マフムードによる10世紀末の侵入をもってインド亜大陸でのムスリム支配者による「1000年のヒンドゥー教徒支配」の開始とみるのは、これまでも珍しくはないが、ここでは8世紀の初頭にはじまるシンド地方へのアラブの進出がヒンドゥー教徒受難の始まりとされる。RRS系とされるシンクタンク、ヴィヴェーカーナンダ国際財団(VIF)の主導で編集された5巻からなる *The History of Ancient India* (企画では全11巻)はシンド進出以前のアラブとの関係を見逃したうえ、突然にこの時点以降の西方からの侵入や征服はすべて「ムスリム」の所業として描かれる。そして‘Ancient India’は「ムスリム王朝」の成立をもって1300年に終焉するという歴史認識が提示される(この点は全5巻の書評である(Pal 2016)に依拠する。この書評は山崎利男先生の御教示による)。

<sup>9</sup> *The Hindu*, 17 May 2015.

14万件の反応があったという（対抗して開かれたタグ #ModiIndiasPride にも相当の反応が集まった）<sup>10</sup>。独立後政治史の極端な単純化はモーディー首相個人の自画自賛と、「オーラ」の演出にまでいきついている。

だが、自画自賛がすぎると、「会議派支配の60年」という会議派に向けられたはずのスローガンは自ら自身にもはねかえる。BJPは、少なくとも60年間のうち10分の1の期間は、A. B. ヴァージュペーイー (Vajpayee) 首相のもとに政権を主導してきたからである。

モーディー首相の言動には、ヴァージュペーイー政権期のBJPの業績や評価に触れる部分が極端に少ないように見える。これには二つの理由が考えられる。第一は、モーディー自身がヴァージュペーイー、L. K. アドヴァーニ (Advani)、M. M. ジョーシー (Joshi)ら長老格の党内での影響力を嫌い、排除したいからである。自然とヴァージュペーイー政権期の「実績」に言及することは少なくなる。こうした身内の軽視がアドヴァーニ、ジョーシーらの長老にとって心地よくないのは当然であろう。かれらは、何の権限もない「教導役」Margadarshakに格上げされてしまった。彼らの不満、とくにアドヴァーニの鬱憤は時折の発言からうかがえるのである<sup>11</sup>。

第二は、1951年のインド大衆連盟(Bhartiya Jana Sangh, BJS)のもとの政治遺産を、モーディーが高く評価しているからである。現政権の政治理念を支えるのは、BJPよりもBJSの政治理念ではないかとすら思えるのである。モーディーら現BJP指導部の隠された意図は、ヴァージュペーイーやアドヴァーニが創りあげたBJPに代わる事実上新たなBJP（それはよりBJSにより近い）を立ち上げることはなかろうか<sup>12</sup>。モーディーの登場を新紀元として打ち出すためには、こうした身内すら軽視する、大胆な演出もまた不可欠なのである。

独立後政治史とそこに登場する中心的な指導者たちに対するこの政権の評価は、現政権が目指している政治の方向性を示す不可欠の材料である。

## （2）「脱会議派」の狙いと標的

モーディー政権による歴史修正主義は、ひとくちに「脱会議派」とはいうものの、会議派のなかで否定さるべき政治家に微妙な色調の差をつけるという特徴がある。大きくいえば、全面的に否定さるべき人物、部分的ないしは選択的に評価されるべき人物、そして「会議派」内部にあっても評価さるべき人物という、三つのグループ分けになろう。

なによりも、初代首相ジャワハルラル・ネルー (Jawaharlal Nehru)は徹底した全面否

<sup>10</sup> ソウルでの演説の様子は”Twitter rage at Modi: Story of #ModiInsultsIndia and #ModiIndiasPride,” *Hindustan Times*, 20 May 2015 による。

<sup>11</sup> (佐藤 2019: 8-9)。

<sup>12</sup> この点はすでに(佐藤 2019: 4-5)で論じた。

定の対象である。選択的な評価の対象がマハートマー・ガンディーであり、会議派内部とは言えないが、不可触民指導者でインド憲法の起草を指導した B. R.アンベードカル (Ambedkar)も選択的評価の対象である<sup>13</sup>。独立前からの RSS の主張を振り返るならば、ガンディーはムスリム宥和の主導者として、またアンベードカルは不可触民の立場を前面に押し出してヒンドゥー社会を分断する政治家として、RSS にとっての敵対者とみられてきた。RSS や BJP は権力への座が視野に入らる中で、この二人に対する評価を微妙に転換させ、モーディー政権に至って、かつてとは 180 度異なる立場に転換している。RSS のメインストリーム化は、自らの歴史そのものの修正（虚偽化）を伴うのである。

さらに意外に見えるかもしれないが、この二人とはやや異なる意味で、選択的に評価されるのがインディラ・ガンディーである。

これに対して会議派内部にあっても、全面的な肯定の対象になるのがネルーのもとで 1950 年末まで副首相、内相を務めたサルダール・V・パテール(Sardar Vallabhbhai Patel)である。ネルー、ガンディー、パテール、アンベードカル、さらにはインディラ・ガンディーという 5 人の政治的巨人を、モーディー政権はどのように再解釈しようとするのだろうか。

### 主敵としてのネルー

まず、ネルーの存在を否定する点では、現政権の動きは徹底している。「脱会議派」といいつつ、その標的はネルー一人に向けられているのではないかと思われるほどである。政権発足の翌日、2014 年 5 月 27 日にはネルー死去 50 年の追悼集会在、会議派の主催でもたれたが、モーディー首相は出席せず、ツイッターで、「初代首相パンディット・ジャワハルラール・ネルーの祥月命日にあたって、弔意を表する」というごく短いメッセージを發したのみであった<sup>14</sup>。いささか勘ぐれば、“punya tithi” (祥月命日) という語は「世俗主義者」のネルーに向けてことさらに選ばれた語であろう。キリスト教徒の会議派総裁ソニア・ガンディーを通常用いられる Madam でなく、ことさらにヒンドゥー教徒的な Rajmata と呼び、ムスリム皇子を意味する Shahzada とラーフル・ガンディーを呼ばわるのと同じ伝である。

ネルーの命日の翌日は独立前からのヒンドゥー至上主義団体、ヒンドゥー・マハーサバー指導者で、「ヒンドゥットゥヴァ(Hindutva)」理念の唱導者、V.D. サーヴァルカル (Savarkar) の生誕 132 年記念日であった。これに寄せたメッセージと比較すれば、い

---

<sup>13</sup> ガンディー、アンベードカルらへの積極的な言及は、会議派その他の政党が彼らの知名度と功績を「排他的に」利用することへの中和剤としても意味があると、ある BJP 幹部は発言している(IE, 16 Oct. 2014)。

<sup>14</sup> 英文では“I pay tribute to our 1<sup>st</sup> Prime Minister Pandit (sic) Jawaharulal Nehru on his Punya Tithi.” IE, 28 May 2014.

かにネルーへのそれが事務的なものかが理解できる<sup>15</sup>。

また RSS の英文機関紙オーガナイザーは「パーンチ・シール（平和五原則）」はインドの主権を否定するネルーの個人的な政策だと断じた<sup>16</sup>。翌 2015 年 4 月のバンドン会議 60 周年の国際会議に出席したスシュマ・スワラージ外相は、ネルーについて一言も言及しなかった<sup>17</sup>。

また州レベルでの動きとはいえ、ケーララの RSS 機関紙は、(ガンディーを殺害した) ナトゥラム・ゴードセ(Nathuram Godse)は、ガンディーではなく、「分離独立の責任があり、ガンディーを心底から尊敬してはいなかったネルー」を標的にすべきであったとまで論評した<sup>18</sup>。

ネルー無視はその後も続く。2017 年 7 月 27 日の新大統領就任演説では、ガンディー、パテル、アンベードカル、ウパッダエ（この人物については後出）が触れられたが、ネルーは挙げられなかった。また連邦政府青年問題省傘下の「ネルー青年センター組織」は 2017 年 9 月に「ナショナル青年センター組織」と改称された<sup>19</sup>。BJP の支配するラージャスターン州では 2016 年 5 月に、教科書の記述からことさらにネルーへの言及を削除した<sup>20</sup>。

そのなかで皮肉ともいえるべきは、2015 年 10 月のインド・アフリカ・サミットで、7 名のアフリカ元首が、演説の中でネルーの非同盟やバンドン会議での努力を評価したこ

---

<sup>15</sup> “I bow to the great Veer Savarkar on his birth anniversary. We remember his indomitable spirit and invaluable contribution to India’s history.” モーディー首相がいずれに「親近感」を抱いているかは明らかである (*IE*, 29 May 2014)。BJP はすでにヴァージューペーイ政権期の 2002 年に、連邦議会内にサーヴァルカルの肖像を掲げている。

<sup>16</sup> *IE*, 3 July 2014; 24 April 2015。2014 年 6 月には、北京で中印とビルマによる平和五原則 50 周年の式典がもたれた。インド政府から参加したのは副大統領のハミド・アンサーリー(Hamid Ansari)であった(*IE*, 29 June 2014)。RSS のラーム・マードヴによれば中国は大統領ないしは首相の参加を要望したが、インド外務省は「熟考して (have done their homework)」副大統領を送ったという。S.スワラージ外相も同時期にダカ訪問をぶつけて参加を拒否したという。「平和五原則」に対するモーディー政権の冷ややかさを示している(*IE*, 28 June 2014)。ベトナムとの友好もネルー・インディラ・ガンディー外交の重要な遺産であるが、1972 年の大使交換の 45 周年がベトナムでは祝賀されたのに対して、インド外務省はこれを無視している（ベトナムでの祝賀についてはアジア経済研究所の寺本実氏のご教示を得た）。

<sup>17</sup> *IE*, 24 April 2015。

<sup>18</sup> *IE*, 25 Oct. 2014。新聞にこの論説が報じられた翌日、RSS の全国宣伝部長は、RSS はいかなる暴力にも与しないと述べて、論説が RSS の正式見解ではないことを強調した(*IE*, 26 Oct. 2014)。

<sup>19</sup> *IE*, 6 Sept. 2017。

<sup>20</sup> *Indian Express* 紙が実施している電子投票では、州政府の措置に賛成 50%、反対 47%、どちらでもない 3%と出ている(*IE*, 10 May 2016)。電子投票の傾向は BJP よりに出るのが常であるが、半数が賛成するという事態に、歴史修正主義の浸透を感じ取れる。

とである<sup>21</sup>。モーディー首相自身も、2015年11月のイギリス訪問時には、国内での非寛容批判を無視できず、「ガンディー、ネルーのインドは不寛容ではありえない」と語った。イギリス国民を前にしてはネルーの存在までは否定はできないのだろう。ネルー外交の遺産は国内ではなく国外で生き続けているという奇妙な事態がここに見られる<sup>22</sup>。

他方でモーディー首相がネルーのパフォーマンスを参考にしたかにみえる行事もある。ネルー首相は、「ネルーおじさん(Chacha Nehru)」という愛称が示すように、生前から子供たちとの交流を重視した。彼の死後、誕生日である11月14日は、インドの「子供の日」として各種公式行事が執り行われてきた。モーディー首相は就任後、9月5日の「教師の日」を選んで全国の小学生向けの演説をおこない、選ばれた子供たちと一問一答形式の対話セッションを設けている<sup>23</sup>。

### マハートマー・ガンディーの矮小化と遺産の総取り

BJPはその結党(1980年)以来、権力への距離の測りながら、ガンディーの評価を微妙に変化させてきた<sup>24</sup>。モーディー政権下でのマハートマー・ガンディーへの評価もまた、きわめて計算されたもののようである。なぜなら、モーディー首相(およびRSS)は、ガンディーの遺産を一方では矮小化しながら、他方で民族運動の遺産を総取りするという、手の込んだ術策を弄しているからである。

矮小化というのは、「清潔なインド(Swachh Bharat)」キャンペーンに見るガンディーの政治的利用である。2014年10月2日ガンディーの誕生日、モーディー首相はマハートマー廟で祈ったあと、デリーの清掃人居住区に直行し、清潔なインドこそがガンディーのめざす目標であったと語り、「清潔なインド」キャンペーンを開始した<sup>25</sup>。ガンデ

---

<sup>21</sup> *IE*, 30 Oct. 2015.

<sup>22</sup> やや似た現象は、2017年9月の訪印時の安倍首相の発言である。首相は祖父の岸信介首相をネルーが温かく迎えてくれたことを歓迎会で披露した。モーディー首相の反応は確認できない(*IE*, 14 Sept. 2017)。2018年9月の米印間外務・国防相対話(いわゆる2 plus 2)でも、アメリカ側がネルー首相による1950年の初の訪米を好意的に取り上げた。インド側には反応がなかった(*IE*, 10 Sept. 2018)。

<sup>23</sup> 9月5日は、インド哲学史研究の泰斗であったインド共和国第二代大統領S.ラーダークリシュナン(Radhakrishnan)の誕生日である。

<sup>24</sup> (Noorani 2000: 48-56)。

<sup>25</sup> 「清潔なインド」キャンペーンのロゴはガンディーが使用したメガネを図案化したものである。このロゴが、2016年11月に切り替えられた新紙幣にまで刷り込まれている。かりにインディラ・ガンディーの時代に紙幣にGaribi Hataoと刷り込まれたらどうだろうか。長期に用いられることが前提の中央銀行の紙幣に時の政府の政策ロゴが刷り込まれるというのはきわめて異常だろう。新札切り替え時のインド準備銀行の後景に退いた印象とともに、中央銀行の中立性と権威が政府によって侵されていることをまざまざと

イーをこのように評価しても、ネルーは評価しないのであるから、ガンディーとネルーの継承関係など問題にならない。またガンディーが生命を賭したヒンドゥー・ムスリム融和の事業に触れないのも、モーディー首相ら BJP によるガンディー「評価」の特徴である。つまりヒンドゥー至上主義者が刃を向けたガンディーではないガンディー、つまりはガンディーの再定義、歴史の修正が行われている。政治学者 S.パルシーカル (Palshikar)は、新政権が「ガンディー・ネルー遺産」の本格的解体に乗り出しているとみて、次のように結論づける<sup>26</sup>。

「学校の生徒に語りかけることでモーディーは「ネルーおじさん」を排除した。そして今や、ガンディーを清潔さに矮小化することで、ガンディー・ネルー遺産の破壊は次の段階に入っているように見える。[中略] いまや新体制は理念の戦線で戦闘を開始した。はるかに御しやすく、無害なガンディーを再発見することで、ガンディーを取り込む最初の一步が踏み出された。新体制がガンディー・ネルー遺産をどのようにして解体するのか、われわれは見守らねばならない。」

ガンディーの遺産の総取り(むしろ横領というべきか)は決して過剰な表現ではない。1942年の「インドを立ち去れ」運動の75周年にあたっては、1942年からインド独立の1947年までの5年間を、2017年から2022年までの5年間に重ねて、「新しいインド New India 2017-2022」なるキャンペーンを開始している。新聞一面を使った政府広報による「新しいインド」キャンペーンでは、「インドを立ち去れ」運動を描いた有名な彫像のシルエットが用いられた。RSSが組織として参加もしていない運動をあたかも自身の成果のように用いることで、独立運動の遺産全体をそっくり手中にすることは、詐術に近い<sup>27</sup>。

それゆえ、歴史修正主義は、ときにその付け焼刃ぶりを露呈する。一例はマハートマー・ガンディー暗殺犯のN.ゴードセイ美化の動きである。この動きは、出身地のマハラシュトラでは以前から根強く存在したが、新政権発足後新たに彼のドキュメンタリー映画を作る動きが見られた。BJPの内部にも、連邦下院議員サクシ・マハラージ(Sakshi Maharaj)によるゴードセイは愛国主義者であるといった発言が飛び出したほか、ヒンド

---

示す事例である。不可思議にもインド国内論調にこの点を指摘するものが見当たらない。(Tillin 2016)がこれに触れているが異なる文脈からである。ついで、2017年1月にはカーディー村落工業後者のカレンダーにガンディーに代わって紬車を回す写真が掲載された。ガンディーにとって代わったモーディーとして、批判が強かったが、ハリヤーナーのBJP政権の保健相は、モーディーがガンディーよりも優れている証拠だとこれを擁護したうえ、紙幣にガンディーを用いてからルピーは価値が減った、モーディーに代えるべきだと語った (*The Hindu*, 14 Jan, 2017; *IE*, 15 Jan. 2017)。

<sup>26</sup> (Palshikar 2014b)。

<sup>27</sup> 左翼戦線が与党のトリプラ州首相マニク・サルカールによる2017年の独立記念日演説ではこの点がはっきりと指摘されていたが、インド国営放送(AIR)は、トリプラ支局に対して演説の放送を差し止めさせた (*IE*, 17 Aug. 2017)。

ウー・マハーサバーは UP 州のメーラトで 2016 年 10 月にはゴードセーの胸像を建てた。マハーラーシュトラ州の町カリヤーンでもマハサバーによるゴードセー胸像建立の動きがある<sup>28</sup>。モーディー首相は「清潔なインド」ではガンディーのアイコンをこれでもかと利用するが、ゴードセーを美化するマハサバーのかつてのリーダーであるサーヴァルカルサヴァルカルの熱心な称揚者でもある。

しかしインド国民のすべてがヒन्दゥー至上主義によるガンディーの矮小化と遺産の総取りを黙視しているわけではない。2019 年末からの市民権法改悪、国民登録制度反対運動では、市民権剥奪を危惧するムスリムだけでなくヒन्दゥー教徒、シク教徒らが一体となって、デリー、コルカタなどの大都市で大衆的な座り込みが行われ、その現場にはガンディー、アンベードカルらの肖像が多数掲げられた。ガンディーの伝統と遺産を現実の運動を通じてヒन्दゥー至上主義者の手から取り戻す動きであった。

### インディラ・ガンディー、強権政治のモデル

つぎに、モーディーないしはモーディー政権によるインディラ・ガンディー評価をとりあげる。かれらは 1975-77 年間の非常事態によって弾圧を受けた側であるから、肯定的な評価をしているとは思えないが、彼らが節々でインディラ・ガンディーによる統治の強権的な側面に一種の共感を表明していることは見逃せない。

実際この間の、モーディーや BJP 総裁アミト・シャハのこの間の発言には、インディラ・ガンディーの否定よりも、強権性、つまりは「指導力」の優劣を彼女と競うような内容が目立つのである。2016 年 4 月には、アミト・シャハがインディラ・ガンディーを評価して、良い指導者は民主的ではありえないと語ったと報道されている<sup>29</sup>。

また 2016 年 11 月 25 日には 11 月 26 日のインド憲法制定の日 Constitution Day を祝う連邦政府人的資源 (=教育) 省の広告が掲載された。広告では大きなモーディー首相の写真とともに、アンベードカルの写真がやや小さく掲載され、インド憲法の一部が書き出されているが、それはアンベードカルが考案したのではない第 51A 条「(国民の) 基本的義務」の部分である<sup>30</sup>。第 51A 条は最後の(k)項—こどもに教育を受けさせる保護者の義務—を除けば、インディラ・ガンディーの非常事態下の憲法改正によって盛り込まれた条項である。モーディー政権は、彼女の遺産であるこの条項を、憲法制定記念日にふさわしい条文と考えているようだ。権利よりも義務を強調するのはモーディー首相自身の主張でもある<sup>31</sup>。

<sup>28</sup> (Malhotra 2014)、(Choudhury 2015)は、こうした動きへの RSS やモーディー首相の沈黙に厳しい警告を発している。IE, 22 May 2017 も参照。

<sup>29</sup> IE, 3 April 2016 のコラム 'Inside Track' より。

<sup>30</sup> IE, 25 Nov. 2016。

<sup>31</sup> 例えば 2020 年の共和国記念日に寄せた発言 (IE, 25 Jan. 2020)。

より近い事例では、高額紙幣廃貨措置をめぐってモーディー首相が BJP 連邦議員団集会で語ったインディラ・ガンディー観が興味深い。モーディー首相によれば、インディラ・ガンディーですらも次回の選挙での敗北を恐れて、ヤミ金に関する調査委員会(いわゆるワンチャー[判事]委員会)と、当時の Y.B.チャヴァーン蔵相の建議にもかかわらず、廃貨措置を実施しなかったというのである<sup>32</sup>。自分は「正しい決定」には反対も恐れず勇気をもって立ち向かっているという自画自賛の発言である<sup>33</sup>。この発言の翌日にモーディー政権は先任者二名を跳び越す陸軍参謀長人事を発表したが、これもインディラ・ガンディー首相による 1983 年の A. S. ヴァイディヤ(Vaidya)参謀長人事以来久々の「飛び越え人事」であった<sup>34</sup>。

こうしてモーディー政権にとってのインディラ・ガンディーは否定の対象ではなく、力技を競いあう相手なのである。それを反映するように、廃貨措置以降、インディラ・ガンディーとモーディー政権のあいだに強権政治としての類似性を指摘する議論が以前にも増して目につくようになった<sup>35</sup>。そのひとつラマチャンドラ・グハの評論は共通点として、独立メディアへの嫌悪と疑念、インタビューや不都合な質問の拒否、議会討論の軽視、野党への侮蔑的態度(会議派を抹殺すべきシロアリにたとえるなど)、内閣や党内での絶対的支配、官僚任命における個人的関係とイデオロギーの重視を列挙している<sup>36</sup>。

たしかに集権的かつ強権的指導者として両者の共通点が多いことは事実であるが、筆者の見るところ二人の間にある根本的な差異について、これらの議論には見逃している点がある。それは非常事態期のインディラ・ガンディーが抱かざるをえなかった政治的

---

<sup>32</sup> モーディー発言が根拠とするのは(Godbole 1996: 87-8)。ただし著者ゴドボレーは、これに続くパラグラフで、当時は(1971 年中ごろ—引用者補)、インディラ・ガンディーの「社会主義」全盛で、「一日に一つのスローガン」が打ち出され、銀行国有化は「ゲッペルス風の宣伝手法」によって、貧困と失業の解決と等置されたと書いている(p.88)。スローガン好みと宣伝熱心な点でもインディラ・ガンディーはモーディーの先駆者であったかもしれない。

<sup>33</sup> <https://scroll.in/article/824703/fact-check-did-indira-gandhi-really-shy-away-from-demonetisation-as-narendra-modi-claimed> を参照。モーディー首相がいかにインディラ・ガンディーを意識しているかは、2017 年 12 月のグジャラート州とヒマーチャル・プラデーシュ州の州議選勝利によって 19 州の政権を BJP が手中にした際、BJP 連邦議員総会で、インディラ・ガンディーの 18 州を上回ったと感激気味に語ったことから知られよう (IE, 21 Dec. 2017)。

<sup>34</sup> *The Hindu*, 18 Dec, 2016.

<sup>35</sup> 例えば、<https://scroll.in/article/825740/modi-just-copy-pasted-indiras-garibi-hatao-slogan-does-this-freudian-slip-explain-his-politics>, *Scroll.in*, 3 Jan. 2017 のほか、(Jaffrelot 2017)、(Guha 2017)など。

<sup>36</sup> これらの特徴については現時点では刊行予定の(佐藤 2021)を参照。

孤立感を、モーディーは全く感じていないであろうと推察されることである。当時のインド政治は独立運動以来の名望家支配のもとにあり、インディラ・ガンディーは非常事態の施行によって、政治エリート層をことごとく敵に回した感がある。女帝といわれようと、その政治的孤立感はいかんともしがたく彼女への重圧となっていたに違いない。1977年選挙をなぜ実施したかについていくつかの仮説はあるが、この政治的孤立感からの脱出が心理的側面からの大きな要因ではなかったか。しかし、出身母体のRSSから見放されでもしない限り、こうした政治的孤立感をモーディー首相が感じるとは思えない。政治指導層を生み出す社会的基盤は、インディラ・ガンディーの名望家政治の時代よりも、深く広くひろがっている。これを政治の民衆化と呼べば呼べないことはない。モーディーの強権政治は、ヒन्दゥー多数派の無視できない下からの支持によって支えられており、インディラ・ガンディーの非常事態政治のようにもろくも崩れ去るということはおそらくないだろう。

#### サルダール・パテルの称揚

こうした、ネルーの否定、ガンディーの矮小化、選択的評価とは対照的に、会議派指導者として全面的に称揚されるのが、ネルーとしばしば対比され、彼の副首相であった**サルダール・パテル**である。RSSにとってパテルはマハートマー・ガンディー暗殺事件後の非合法化を解除した政治家であり、RSSの難民救助などの活動を評価し、ムスリムへの不要な敵意を捨て、愛国的な事業に参加せよと会議派への加入を勧告した人物であった。ネルーとは対照的に、その評価が肯定的なのは当然である<sup>37</sup>。

パテルの称揚については、前稿で指摘したパテル像である「統一の像 (Statue of Unity)」が建立されたほか<sup>38</sup>、この間政府の肝いりでパテルの伝記作成プロジェクトが立ちあげられた。またパテルの誕生日10月31日は、「民族統一の日(Rashtriya Ekta Diwas)」と名付けられ、以降かれの誕生日には各種の官製行事がとり行われている<sup>39</sup>。

<sup>37</sup> マハートマー暗殺とRSSによる関与の疑惑については、(Goyal 2000: 188-210)参照。非合法化解除(1949年7月11日)の政府コミュニケは同じくpp.254-5、その根拠とされたRSSが新たに制定した規約については、pp.256-268参照。

<sup>38</sup> パテル像については、(佐藤 2014)参照。建設の入札は2014年7月に行われ、Larsen & Turboが298億ルピーで落札した。全国の農民から「寄進」された農具の鉄は、同年6月現在700トンで、目標の約半分であった(IE, 25 June, 11 July 2014)。さらに2014年8月には、インターネット上での献金を呼び掛けるサイト作成をコンサルタント業のアクセンチュア社に委託した(IE, 26 Aug. 2014)。建設への公費投入を擁護する記事に、“No cost matters for national pride,” *The Organiser*, 27 July 2014。2018年10月31日にその完工式がモーディー首相の出席のもとに挙行された。

<sup>39</sup> 10月31日はインディラ・ガンディー首相の暗殺された日でもある。2015年には、モーディー政権はこの日に向けてパテルと「民族統一の日」の政府広告をしきりに新聞紙上に掲載し、当日もインディラ・ガンディーに関する公式行事はなかった。会議派は

### アンベードカル評価の狙い

会議派それ自身と一体ではないが、新政権や RSS によって選択的肯定の対象となっているのが、インド憲法起草委員会の委員長、不可触民指導者の **B.R. アンベードカル** である。BJP によるアンベードカルへの肯定的な評価の背後には、マハーラーシュトラ州やビハール州において、不可触民政党との提携を進めているという政治的な思惑があることは否定できない。アンベードカルの生誕 125 周年(2016)にむけての祝典準備を 2015 年 10 月に予定されるビハール州議会選挙のキャンペーン開始と重ね合わせたことにも、政治的な意図が感じとれる。しかしより重要なことは、こうした政治的意図に加えて、BJP や RSS が理念の側面からアンベードカルに彼ら独自の評価を与えていることである。評価の根底にあるのは、「平等(samata)でなく調和(samarasta)」というヒンドゥー至上主義による不可触民層の統合の論理である。RSS は、アンベードカルが不可触民の偶像(icon)やカースト主義者ではなく社会的調和と民族統一の支持者であり、政治改革よりも社会改革を強調した、などとしてアンベードカルを自陣に深く引き入れる、数々の理念的な操作を行っている<sup>40</sup>。アンベードカルに関して、こうした理念的な操作を可能にする最大の要因は、彼が改宗の対象として、長い模索の末、最終的に仏教を選択したこととも関係があると筆者は考えるが、この問題には立ち入らない。RSS による不可触民包摂の論理である「調和」論についてはモーディー政権下での不可触民の地位を検討する際に改めて取り上げてみたい。

だが、アンベードカルの肯定的評価は、RSS の歴史の中では比較的近年の事象であり、ガンディーの場合と同様、その付け焼刃性は折に触れて露呈されることは強調しておきたい。UP 州などの地方都市や農村部で不可触民の支持者らによって建立されているアンベードカル像が、破壊、損傷されたり、「浄化」と称して牛乳で洗浄されるなどといった行為が、RSS や BJP 支持者によって堂々で行われている。

### (3) 政治的パントエオンの新たな偶像

---

党として新聞紙上にインディラ・ガンディーを讃える広告を掲載した(*The Hindu*, 31 Oct. 2015)。

<sup>40</sup> *The Organiser* 紙でのアンベードカル論については、“Dr. Ambedkar was a ‘Rashtranayak’,” 10 Aug. 2014, “Dr. Ambedkar, a misunderstood national leader,” 19 April, 2015, “Understand Babasaheb in holistic perspective,” 26 April 2015, “Unmasking pseudo-Ambedkarite,” 14 June 2015,(Guha 2015)への反論である Vaidya, M. G., “RSS & Ambedkar: Fixation about a movement,” 3 Jan. 2016, “Social equality is a matter of conviction,” 2 April 2017 (RSS 最高指導者 M. バーグワットへのインタビュー)などを参照。2017 年には、2016 年 11 月の高額紙幣廃貨後に導入された政府推奨の電子決済のアプリケーションをアンベードカルのファーストネームに重ねて BhimApp と名付けている。

会議派主流政治家やアンベードカルをこのように色分けした後に、新たなパンテオンに加えられるのが、BJPの前身であるインド人民連盟(BJS)の3名のリーダーである。すなわち、BJSの創設者シャマ・プラサード・ムカージー (Shyama Prasad Mookerjee)、RSSからBJSの党建設に「出向」し、創設から1968年の事故死まで、事実上党組織を担ったディーンダヤル・ウパッダエ (Deendayal Upadhyaya)<sup>41</sup>、それにウパッダエとともに活動し、その死後にはウパッダエの理念を継承した農村開発事業に専心したナーナージー・デーシュムク (Nanaji Deshmukh) の3名である。モーディー政権の開発事業のうち都市再開発事業にシャマ・プラサードの名が、そして農村電化、障害者リハビリテーション、雇用・職業訓練の3事業にディーンダヤル・ウパッダエの名が冠らされている。2017年3月の州議会選挙で勝利したウッタル・プラデーシュ州政権は、ウパッダエの思想を高学年生徒の教材に採用した<sup>42</sup>。

シャマ・プラサードについては全集の刊行、コルカタに記念館の設立が連邦文化省の肝いりで進められている<sup>43</sup>。

2015年2月23日のプラナブ・ムカージー大統領による予算会期の開会演説は、こうした歴史修正主義の総決算の趣がある。演説はまずBJSの創設者シャマ・プラサード・ムカージーによる「インドの力の最大の源泉はその精神的、文明的遺産にある」の言を掲げた。ついで演説は、ディーンダヤル・ウパッダエの「統合的人間主義(Integral Humanism)」と訳される Ekatma Manavta Darshan (統合的人間哲学) を、すべての人間の総合的な発展を促す哲学として称揚した<sup>44</sup>。この二つの柱がモーディー政権の根本的な政治理念として冒頭に提示されたのである。「統合的人間主義」はBJPの規約にも、党の基本哲学(Basic Philosophy)として掲げられているが、ここでは政府の統治原理として強調されているのである。

続いて演説が触れたその他の政治家としては、元首相A.B.ヴァージュペーイー、ナーナージー・デーシュムク、M.M.マラーヴィーヤとサルダール・パテル (両名とも会議派ナショナリズム内部の非ネルー派と位置付けられる。マラーヴィーヤはヒンドゥー・マハーサバーの議長を務めたこともある) が挙げられるにすぎない。演説はBJPのスローガン「一つのバーラト (インド)、比類なきバーラト (インド)」で結ばれた。

<sup>41</sup> RSSの側からするウパッダエとBJSの創設時の背景などは、(Kelkar 1991: 27-46)ほか参照。

<sup>42</sup> IE, 18 June 2017.

<sup>43</sup> IE, 26 April 2017. シャマ・プラサードについては(Madhok c1954)および(Chatterji 2015)参照。

<sup>44</sup> この思想をごく単純化して説明を加えれば、‘integral’あるいは‘ekatma’には、個人と社会の統合性(無矛盾性)および、人間の活動目的における物質と精神の統合性という二側面が含まれる。詳しくは(Nene 1991)を参照。

この演説からも、モーディー政権が近現代インドのいかなる思想、政治潮流を継承しているかは明らかであろう<sup>45</sup>。

就任年の10月から毎月一回の頻度で、モーディー首相は国営放送でラジオ講話、Mann ki Baat（心の言葉）を流している。その内容については改めて詳しく紹介したいが、ここで取り上げられる人物も、RSS/BJPの歴史修正主義を反映した内容になっている。次の表1.01には講話が始まった2014年10月からの3年間に特定人物が取り上げられた月数と、その言及の頻度を整理したものである<sup>46</sup>。

表 1.01 モーディー首相のラジオ講話で取り上げられた人物 (2014.10~2017.9)

人名	2014.10-15.9	2015.10-16.9	2016.10-17.9	合計（月数）	言及頻度
Mahatma Gandhi	4	10	5	19	81
B. R. Ambedkar	3	4	7	14	28
Sardar V. Patel	2	3	3	8	20
P. J. Abdul Kalam	2	2	2	6	11
Deendayal Upadhyaya	3	1	1	5	11
L.B. Shastri	2	1	1	4	4
A. B. Vajpayee	1	0	2	3	3
J.P. Narain	0	1	2	3	3
Nanaji Deshmukh	0	0	1	1	6
Subhas Chandra Bose	1	0	0	1	4
V. D. Savarkar	0	0	1	1	4
Indira Gandhi	0	0	1	1	3

（出所）<http://www.pmindia.gov.in/en/mann-ki-baat/>における講話の英文テキストから筆者が集計した。

ガンディーへの言及は圧倒的に多い。その多くが「清潔なインド」（便所の普及）キャンペーンについて触れたものである。アンベードカル、サルダール・パテルが第二位と第三位で、元大統領アブドゥル・カラムとRSSのウパッダエらがそれに続く。当然ながらここでもネルーは完全に無視されている。

### 第3節 文化ナショナリズムと「文化の政治」

<sup>45</sup> これを議会に向けて読むのは会議派の「最長老」政治家であるプラナブ・ムカージー大統領である。職務とはいえ、どのような感慨をもってこの文書を読むのであろう。

<sup>46</sup> 首相のラジオ講話については、取り上げられる主題の偏り、政治的発信手段としての特徴を別途検討せねばならない。

しかし、歴史の修正は、今日の政治におけるヒンドゥー至上主義のメインストリーム化へのひとつの重要なステップではあるが、すべてではない。それにもまして重要なのは、「文化」と政治の不可分性ないしは一体性というヒンドゥー至上主義の理念を政治的な実践の中に定着させることである。RSSは1951年のインド人民連盟(Bharatiya Jana Sangha, BJS)の創設以来、そのための努力を払ってきた。

今日までの彼らの試みには大きく見て二つの側面がある。第一は、ヒンドゥー教徒多数派の文化を「インド文化(Bharatiya sanskriti)」とする意識を国民に共有させることである。第二には、こうした「文化」を政治に持ち込むために、「文化の政治」の党派性、宗教性を除去あるいは隠蔽する作業である。「ヒンドゥー」という宗教的な帰属につながる範疇を、いかに世俗政治的な文脈に流入させるか、とくに1980年代以降のRSSやBJPの努力は、この一点に集中された。政教分離(secularism)を攻撃しながらも、その換骨奪胎をはかることで、自らのメインストリーム化への障害物を除去することが狙いである。

### (1) 文化ナショナリズムにおける「文化」

第一の側面から考えてみたい。いったい「文化ナショナリズム」における「文化」とはいったい何か、ヒンドゥー至上主義をインド政治のメインストリームに位置づける装置として、かれらの「文化」概念はどのような効果を発揮するのだろうか。

「文化ナショナリズム」なる用語そのもののなかに、すでに彼らの想定する「文化」には、他文化に開かれた交流可能なものとしてではなく、排他的、特権的な意味合いが与えられ、それゆえに独特な政治行動の引き金となることが予定されている。

ヒンドゥー・マハーサバーやRSSなどのヒンドゥー至上主義団体のもちいる「文化」とは中立的な概念ではない。文化を意味する *sanskriti*, *sanskriti* という言葉そのものが、すでに一定の負荷がかけられている。サーヴァルカル *Hindutva* においては、その構成要素に領土(*rashtra*)、血の絆(*jati*)、そして文化(*sanskriti*)の3要素が挙げられる<sup>47</sup>。RSSの第二代最高指導者(Sarsanghachalak)M. S. ゴールワルカルは *nurture* と *culture* という対比を用いて、その土地にいかにも生まれ育とうとも、人々の忠誠心、資質、生活様式を規定し、統一した民族社会を構成するのは「文化」以外にありえないとする。異なる文化をもつ人間が共同社会を構成することは不可能だというのである<sup>48</sup>。RSSの肝いりで結成された、BJPの前身インド人民連盟(BJS)も、その規約の第3条(党の目的)で、

<sup>47</sup> これらはそれぞれ母なる地(*matribhu*)、父なる地 (*patribhu*)、聖なる地 (*punyabhu*)の三つに対応する。ヒンドゥーのみが全要素を共有する。外来宗教の信徒であるキリスト教徒とイスラーム教徒は生まれた土地のみ、また時に血の絆をも共有するにとどまる。(Savarkar 2003 [1923]: 102-116)参照。

<sup>48</sup> Golwalkar, "For a Virile National Life," (Golwalkar 2000: 120-132)参照

「インドの(Bharatiya)文化(Sanskriti)と価値 (Maryada) を基礎とする政治的、社会的、経済的民主主義国」を建設することをその目的と規定している<sup>49</sup>。

本章冒頭のローンゴワルからの引用が示すような「古代からの崇高な文化的諸価値」や「文化の活性化」に懐疑的になるようではヒンドゥーたる資格はないのである。こうした団体が時の政権と一体のメインストリームとなれば、それは「反知性主義」的傾向の極めて濃厚な、文化的な権威主義以外の何物でもない。つまるところ、「文化の政治」は、ヒンドゥー・アイデンティティ、つまり Hindutva への統合とマイノリティの排除を目標とする政治なのである<sup>50</sup>。

「文化団体」としての RSS の真骨頂は反ムスリム暴動の火付け役や反マイノリティ主義だけではない。文化と政治の境界を取り払うことは「政治の文化化」だが、境界があいまいになれば、それは同時に「文化の政治化」へと転ずることになる。政党が文化に傾斜すれば、逆に文化団体と称する RSS が政治に傾斜しても、何ら不自然にみえまい。境界そのものがなくなるのだから。政治団体と文化団体を都合により使い分ける必要も薄れるのである<sup>51</sup>。

さらに RSS は非合法化解除の目的で作成した 1949 年規約の第 4 条「政策」の部分に、この間、無視することのできない変更を加えた。1972 年 7 月の改正で、それまで「政治ではなく、純粋な文化的活動に専心する (The Sangh, as such, has no politics and is devoted purely to cultural work)」とあった部分は、「政治から距離を置き、社会および文化の分野に専心する(The Sangh is aloof from politics and is devoted to social and cultural fields)」と書きかえられた<sup>52</sup>。

政治は否定ではなく「距離を置く」対象となり、活動も「文化」のみならず「社会」も含むより広い分野にまで広げられた。RSS によるこの間の牛屠殺禁止運動(1966)や、新たな「文化団体」としての「世界ヒンドゥー協会(Viswa Hindu Parishad, VHP)」の立ち上げ(1964)など、RSS 活動の本格化を視野に入れての改正であったろう<sup>53</sup>。

「文化の政治」こそが、モーディー政権が進めるヒンドゥー至上主義政治のさまざまな特徴を包括的に表現することができる。それは歴史修正主義を推し進めながらインド

<sup>49</sup> (Bharatiya Jana Sangh 1973: 203)のほか、(Bharatiya Jana Sangh 1965: 3, 12-3)も参照。

<sup>50</sup> (Palshikar 2014a) は、この過程を”politics of culture and norms”と規定する。

<sup>51</sup> (Kasbe 2019: 67, 160)は RSS が政治的と非政治的を自己の都合で使い分けると指摘する(原著は 1978 年にマラーティー語で出版された)。

<sup>52</sup> 1972 年 7 月 1 日に改正された規約の全文は、(Kelkar 2011: Appendix 2)。引用部分は、p.320。

<sup>53</sup> この規約改正の時期は、最高指導者のゴールワルカルからデーオラスへの交替(1973)、特に後者の下での各種 RSS 傘下団体の新設や活性化によって特徴づけられる(Andersen and Damle 2018: 6-7, 262-3)。ただしこの著では 1972 年の規約改正について触れていない。

政治の言説そのものを転換することによって、政権基盤の中心的な柱である RSS を、(BJP とともに) インド政治のメインストリームに据えるための舞台装置でもある。なぜなら、RSS の自己規定は「文化団体」<sup>54</sup>であり、文化と政治の境界を取り払うことで、RSS は自らをインド政治の主流へと押し出そうとするからである<sup>55</sup>。

## (2) 「生活様式」としての「文化」—ヒンドゥー多数派主義の日常化—

ヒンドゥー至上主義による「文化」概念が、「文化」を事実上「ヒンドゥー文化」と同一視するものであるとはいえ、これを直ちに政治に流用することは、必ずしも容易ではない。インド独立後のインド人民連盟(BJS)、さらには 1980 年の BJP 結成以降の政治史を見ても、ヒンドゥー至上主義へのイデオロギー的純化は、支持基盤の拡大を妨げるものとして、政治におけるメインストリーム化への障碍とみなされたこともあった<sup>56</sup>。

だが 1990 年代以降の BJP の躍進は、ヒンドゥー至上主義への国民の抵抗感をさまざまな形で和らげながら進化した。RSS、BJP は国民会議派の「セキュラリズム」を選挙におけるムスリム票獲得のための政治的計算に基づく「偽のセキュラリズム」と断じて、ヒンドゥー教徒の支持を吸引し、社会の分断を図った。会議派のヒンドゥー多数派への妥協的な対応もあって、「セキュラリズム」理念自体の政治的な価値もまた減耗したのである<sup>57</sup>。「セキュラリズム」は、BJP の支持者たちから「シック(sick)ラリズム」などと揶揄されるまでに至った。

こうした BJP による戦略を意外な形で助けたのは、1996 年に最高裁が下したひとつの判断であった。それが最高裁 J.S. ヴァルマ (Verma) 判事(ほか一名の判事)による 1996 年判決 (*Dr. Ramesh Yeshwant Prabhoo vs Shri Prabhakar Kashinath Kunte & Ors*)<sup>58</sup> である。

---

<sup>54</sup> マハートマー・ガンディー暗殺後の非合法化に際して、RSS は自らを「文化団体」と規定することによって、副首相・内相のサルダール・パテルから非合法化解除の措置をとりつけたのである。その際に制定した規約の第 4 条「政策」には、社会の秩序ある進歩を平和的にめざし、ヒンドゥー社会の文化的伝統に従いあらゆる信仰に対する寛容の原則を保持することを謳ったあと、「RSS はそれゆえに政治ではなく、純粋な文化的活動に専心する」と書きこまれた (Goyal 2000: 257-8) ただし初版は 1979 年。この部分は既述のように 1972 年 7 月 1 日に改正された(注 52)。

<sup>55</sup> (Panikkar 2009: 33-4)において、歴史学者パニカルは、1963 年のヴィヴェーカーナンダ生誕百年祭に当たって、RSS がカンニャークマリーに記念館の建設を主張したことが、独立後の「文化ナショナリズム」戦略の第一歩であったとする(この指摘は 1993 年 2 月のボンベイにおける講演の際のものである)。

<sup>56</sup> 1980 年の BJP 結成から 1986 年以降のヒンドゥー至上主義への傾斜など、1980 年代の BJP 内部における綱領路線の揺れは。この問題と関連する。

<sup>57</sup> BJP による「偽のセキュラリズム」批判の核心は下記文献に簡潔に描かれている (Advani 1993: 1-2)。

<sup>58</sup> All India Reporter (AIR) 1996 SC 796 を参照。1987 年のマハーラーシュトラ州議会選挙に当たってシヴ・セーナー(党)の候補の応援演説に立った同党首バラサーヘブ・ター

この判決では、Hinduism と Hindutva の間に何らの区別も認めず、ひとくくりにしてこれらの概念に「生活様式 (way of life)」解釈を適用した<sup>59</sup>。

英語で way of life、インド諸語で jivan paddhati、jivan vyavahar などと訳される「生活様式」<sup>60</sup>という語には注意が必要である。R. センが説くように、ヒンドゥーイズムのこの解釈 (way of life) は、碩学ラーダークリシュナン大統領に淵源をもつが、当時においては、ヒンドゥーイズムの多様性を貫く共通の特徴を抽出する、いわば世俗主義的、合理主義的解釈であったろう。だが皮肉にも、この判決はむしろ「ヒンドゥー」なる範疇を世俗的活動に自由に持ち込むことを許したのである。サーヴァルカルの Hindutva にも全く触れず、1990年代以降の政治における Hindutva を標榜する団体の攻撃性にも何らの関心を払わずに、Hinduism や Hindutva をひとしなみに「生活様式」と断じたこの判決を、BJP や RSS はおおおいに歓迎した<sup>61</sup>。「生活様式」を「習俗的行為」とおきかえてみれば、ここには日本における政教分離に関する地鎮祭判決などと並行する現象が見られる<sup>62</sup>。

ヴァルマ判決についてはさらに詳しく述べる必要があるが、ここでは「生活様式」という何の変哲もない語が深刻な意味を含んでいること、ヒンドゥー文化の政治流用が「生活様式」によって正当化される根拠をこの判決が与えていることを強調しておきたい。

実際にはヒンドゥー多数派社会の「文化」を前提としながら、「文化の政治」に党派性や特定の宗教への肩入れをともなわない中立的な外観を与え、政治における多数派文化(sanskriti)の政治流用をヒンドゥー至上主義がはばかることなく推し進めるうえで重要なのが、「生活様式」としての文化あるいは宗教という概念なのである。

ヒンドゥー的な文化要素を「生活様式」として日常慣習視し、その特定宗教への帰属性をあいまいにすることによって、社会的多数派の「文化」がメインストリームとして受容され、それに伴う意識的、無意識的な不寛容が問われることのないままに、日常生活のなかにすら持ち込まれる。「文化の政治」はヒンドゥー至上主義に拠って立つモー

---

クレーが、インドがヒンドゥー教徒の国家であるとしてヒンドゥー教徒の支持を訴えたことから、宗教的な訴えを禁止する選挙法規に抵触するものとして当選無効が宣せられた。それに対する不服を最高裁に訴えた事件である。2名の判事によるこの判決をより多数の判事からなる法廷で見直す動きが時に伝えられるが(例: IE 16 oct. 2016 を参照。)実現していない。

<sup>59</sup> (Sen 2010: 22-29)を参照。

<sup>60</sup> 英語からの直訳のようにみえる。ベンガル語では jivan dhara などという表現もある。

<sup>61</sup> (Rama Jois 1996)および同じ出版社からのヒンディー語による論集(Suruchi Prakashan 1996)を参照。ヴァルマ判決批判の一つとして(Noorani 2002: 71-75)参照。

<sup>62</sup> 地鎮祭を習俗的行為として合憲とした津地鎮祭訴訟、最高裁大法廷審判決(昭和 52 年 7 月 13 日。5名の判事は違憲と判断)。<https://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~suga/hanrei/25-3.html>を参照(2021年3月11日最終アクセス)。

ディー政治の最大の特徴であるといえる<sup>63</sup>。

### (3) 「ヒンドゥー化」としての「文化の政治」——三つのアジェンダ——

それでは、じっさいに「文化の政治」のもとでは、どのような目標、ないしアジェンダが提起されてきたのだろうか。ここで注意しなければならないのは、RSS/BJPのアジェンダの多相性である。多岐にわたるヒンドゥー至上主義のアジェンダを整理する一つの試みとして、彼らの提起しているアジェンダ全体の目標を「ヒンドゥー化」と規定し、それを三つの分野、すなわち、国家、社会、理念という3分野に整理してみたい(図1.01)。この三つの分野は必ずしもさい然と分けられるわけではない。たとえば教育、改宗、牛保護などは法制的な枠組み、つまり国家が大きく関係してくるが、アジェンダの実現の手段ということになると、国家アジェンダにおいては立法や司法判断が決定的な意味をもつものに対して、社会アジェンダではマイノリティに対するむきだしの直接的かつ日常的な暴力がその実現の決定的な手段となる。

2014年のモーディー政権発足以降の動きは、三者のうち理念と社会の「ヒンドゥー化」がまず先行し、その土台の上に国家の「ヒンドゥー化」が推進、完成されるという経緯をたどった。この間のRSS, BJPの動きを克明に追えば、戦略的そして時期的にも理念と社会の「ヒンドゥー化」が先行し、そのうえで国家の「ヒンドゥー化」が推進されたことは極めて明瞭である。これが2014-19年間における、ヒンドゥー至上主義によるインド国家改造の軌跡なのである。

---

<sup>63</sup> 筆者は以上で、より一般的な意味を持ちうる「文化の政治」を、ヒンドゥー至上主義(もしくは文化的多数派主義)政治と同義化して用いた。この点で疑問や批判を招くであろうことも認識している。他方たとえば(ジジエク 2010: 174)では、サミュエル・ハンチントンによる「文明の衝突」論をとりあげ、「文化の政治化」、「政治の文化化」、「生活様式」という概念を用いながら批判的に考察している。このことはヒンドゥー至上主義政治が冷戦後世界へのある種の視座と共鳴関係にあることを示すものとして興味深い。あるいはまた、ガンディーの政治思想を「国家よりも社会、あるいは文化」とみなし、RSSの立場との共通性を指摘する議論があるが(Jaffrelot 2017)、RSSの思想が「ヒンドゥー国家」論でもあることは自明である。それゆえに異なる文化の間に成立する社会・政治空間を否定するRSSの思想と、ガンディーの思想が「文化、社会を強調している」という共通点をもつことのみを強調して同列に置くことは正しい理解だろうか。もちろん「文化の政治」という規定が含むより広い含意(より積極的な意義を認める議論も含め)については、別途の検討が必要である。

図 1.01 「文化の政治」の三種のアジェンダ

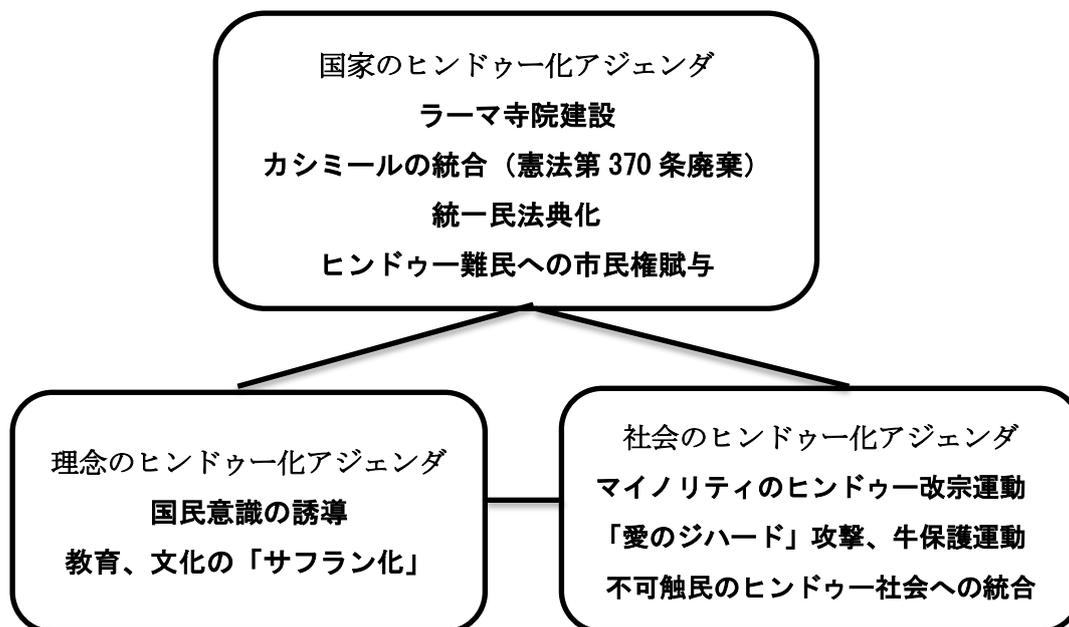


図 1.01 は、三つのヒンドゥー化アジェンダが含む諸要素を示したものである。ひとつの極に憲法改正をはじめ、法制改革を含む「国家のヒンドゥー化アジェンダ」が置かれる。多数派ヒンドゥー主義を反映するラーマ寺院建設、ムスリム家族法の廃棄を主眼とする宗教横断的な統一民法典の制定、カシミールの完全統合（憲法第 370 条の撤廃）のいわば「三種の神器」のような多数派的国家統合のアジェンダである。すでに市民権法改正という形で手が付けられている周辺諸国からのヒンドゥー教徒難民のみへの選別的な市民権（国籍）賦与政策を加えることもできる<sup>64</sup>。このアジェンダの特徴は、憲法制度、法制度として実現されるべきものであり、議会や司法府による裁可、同意の手続きを必要とする<sup>65</sup>。

第二の極にあるのは「理念のヒンドゥー化アジェンダ」である。すでに見たように、RSS 指導部やモーディー首相の発言には、色濃い歴史修正主義とともに、国民の意識や精神面での誘導、さらには彼らの好む形での改造を優先的な課題とみなす発想がうかがわれる。政権による「国民意識の誘導」がどのような方向に国民の関心を誘導しようとするのか、そのためにいかなる制度、手段が用いられているのか。モーディー政権が登

<sup>64</sup> インドへの流入移民、難民に対する市民権付与の問題については、(佐藤 2020)参照。

<sup>65</sup> モーディー政権の内相ラージナート・シンは、政府がラーマ寺院の建立を促進できない理由として、2015年5月には上院での過半数の欠如をあげ、その一年後には、用地が最高裁の係争事項となっていることを挙げた(*The Hindu*, 10 May 2015; 28 May 2016)。2017年3月のUP州議会選挙も BJP はラーマ寺院の建設を中心的な争点にはしなかったが、同選挙での BJP の勝利や、同年8月の連邦上院改選で BJP が過半数を制したことで、モーディー政権もラーマ寺院建設への圧力を回避する論拠が失われつつある。

場する以前には、こうした理念操作について、こと改めて議論が必要になる場面に遭遇することはほとんどなかったといっていよい。しかし、モーディー政権論においては、こうした分野の検討は政権の基本的な性格を見極めるうえでの重要なかぎとなる。ヴァージペー政権が試み、モーディー政権がより大規模に推進している教育や文化の「サフラン化 saffronisation」<sup>66</sup>も、理念のヒンドゥー化アジェンダの一部として、検討されねばならない。

第三の極には、RSS、BJP傘下の組織を直接に動員することで実現をめざす「社会のヒンドゥー化アジェンダ」がある。このアジェンダの行きつく先は、多数派の社会的なヘゲモニーの確立、「二級市民化」ともいべきマイノリティへの不寛容である。またその手段が、説得よりも組織的動員の形態をとり、しかもそれがしばしば直接的な暴力を伴う点で、「文化の政治」の最も凶暴な側面を代表する。のちに検討する「調和 samarasta」イデオロギーにもとづく不可触民のヒンドゥー社会への統合もこのアジェンダの欠かせない一部である。

重要なのは、これらの三つのアジェンダが、それぞれ目標を実現する手段を異にしながらも、相互に関連し補完しつつ、総体として「ヒンドゥー国家」実現を推進する関係にあることである。RSS、BJPが中央だけでなく数多くの州政権を奪取しているという状況は、これら三つのアジェンダの実現にまたとない機会を与えている。「社会のヒンドゥー化」アジェンダにしても、警察や刑事司法による有形無形の肩入れがその推進に大きく貢献するのであるから<sup>67</sup>。

こうして、モーディー政権とRSSの協力関係のもとに、三つの分野におけるヒンドゥー化のアジェンダを相互補完的に進行させるというのが、権力についてヒンドゥー至上主義による「文化の政治」のメカニズムである。「文化の政治」のもとでは、この3種のアジェンダが、ヒンドゥー至上主義という根を共有しながらも、現象としては「社会のヒンドゥー化アジェンダ」に見られるような、あからさまに反マイノリティ的な「凶暴な顔」と、国民の理念に働きかける様ざまな意匠が凝らされた「理念と文化のヒンドゥー化アジェンダ」に見られる一見「柔和な顔」を両極端にして、その中間型ともいべき多種多様な相を現すことである。

最後に、この序論に続く本論部分の構想について付記しておきたい。本論部分では、時系列に沿う形で、まず「理念のヒンドゥー化アジェンダ」の内容を、そしてそれと並行する「社会のヒンドゥー化アジェンダ」に見られる反マイノリティ的な「凶暴な顔」

---

<sup>66</sup> サフラン色はRSSやBJPにとどまらずヒンドゥーの宗教者に共通の象徴的な色である。

<sup>67</sup> (Chopra 2014)、(Farasat and Jha 2016)の両著で共通して指摘されるのは、反マイノリティ暴動における加害者や治安当局に対する「お咎めなしの文化 (culture of impunity)」である。

について、それぞれ詳述する。そして **RSS** や **BJP** の究極の目標でもある「国家のヒンドゥー化アジェンダ」が、これらマイノリティに対する不寛容政策を通じて浮上してくる事情を明らかにしたい。これらの記述を通じて、2014年に成立した **BJP** 政権が、2019年の連邦下院選挙での圧倒的な再選を経て、理念、社会、国家の「ヒンドゥー化」をその完成の一手手前まで推し進めてきた軌跡を描くことができるだろう。

## むすび

そのような作業の全体を今の段階で要約することは難しいが、これまでの記述で示された範囲で、ヒンドゥー至上主義における歴史修正主義と「文化の政治」という主題が提起する問題を以下4点にわたって述べ、この段階でのむすびとしておきたい。

第一に、**RSS**、**BJP**による「文化」は、いうなれば複数形ではなく、単数形である。かれらの「文化」とは「ヒンドゥー的な通念、感覚、生活様式」にはほかならないから、これは多元主義を否定する多数派主義でもある。モーディー政権の重要な理念的特徴はこうした文化的多数派主義である。言うまでもなく、この特徴は独立以前からのヒンドゥー至上主義の伝統を受け継ぐものである。

第二に、「ヒンドゥー的な通念、感覚、生活様式」というものを創りあげるにあたり、首相から、正副大統領の席までをも征服した **RSS** が、そのスタンダード・ベアラーとして自認し、かつそう見なされつつある、つまり「メインストリーム化」されるという側面である。

ゆえに、「文化の政治」のもとでモーディー政権は **RSS** と同一のシンボリズムを多用し、「同じ言葉」を語り、その「メインストリーム化」を着々と進行させている。「文化の政治」は「シンボリズムの政治」でもある。この間の首相の発信は **RSS** のイデオロギーと微妙に共鳴し合うように計算されており、その共鳴作用が、**RSS** に対する国民の抵抗感を薄める効果をもつのである。

第三に、「文化の政治」のもとで首相は道徳的、倫理的な権威を主張し、ヨーガの集団実技やラーマ寺院の「地鎮祭」を先導することで、「文化的指導者」としても振る舞う。このような政治の下では首相と政権に対する批判が、現実的な政策の次元ではなく、道徳的、倫理的さらには文化的な権威への反逆であるかに描き出される。文化の多様性や自由な言論（異論）への不寛容がここから生まれる。

第四に、「文化の政治化」のもとで、政府の事業を多数派文化の文脈にのせることは、多数派を自覚するヒンドゥー教徒にとっては「心地よい」もしれない。首相がヒンドゥー教徒の文化的なシンボリズムを多用すれば、多数派であるヒンドゥー教徒は、首相を身近な仲間の一員として受け止めることだろう。しかし、これは政治的には、明らかに

「禁じ手」である。グジャラート、マディヤ・プラデーシュなど BJP の与党州では、すでにほとんど何らの制約もなく進行しつつある事態ではあるが、連邦政府レベルでこうした「禁じ手」を本格的に、しかも堂々と多用するのは、ヴァージューパーイー政権期にも見られなかったことであり、モーディー政権をもって嚆矢とする。

モーディー政権が、単に政権をとるのではなくインド政治の言説空間を、そっくりヒンドゥー至上主義に切り替える、ヘゲモニックな政治を目指していることは、疑う余地がない。

### 参考文献

- 佐藤宏 2014. 「モディ政治を占う——2014年インド総選挙と新政権の発足」『アジア研ワールド・トレンド』9月号 31-41. <http://hdl.handle.net/2344/00003410>
- \_\_\_\_\_ 2019. 「モーディー政権下における政党政治—「一党優位」の復活か連合政治の新段階か」堀本武功、三輪博樹編『モディ政権とこれからのインド』日本貿易振興機構アジア経済研究所、2018年度調査研究報告書。  
[https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Download/Report/2018/pdf/2018\\_2\\_40\\_01\\_1\\_ch01.pdf](https://www.ide.go.jp/library/Japanese/Publish/Download/Report/2018/pdf/2018_2_40_01_1_ch01.pdf)
- \_\_\_\_\_ 2020. 「インドにおける移民排除法制の展開：インド北東地域を中心に」日本貿易振興機構アジア経済研究所。  
<http://hdl.handle.net/2344/00051565>
- \_\_\_\_\_ 2021. 「モディ政権の「参謀本部」—首相府による集権的統治の構造」堀本武功・三輪博樹・村山真弓(編)『これからのインド——変貌する現代世界とモディ政権』東京大学出版会(2021年3月刊行予定)。
- ジジエック、スラヴォイ 2010, 『暴力 6つの斜めからの省察』(中山徹訳) 青土社。
- Advani, L.K. 1993, 'Foreword' in *BJP's White Paper on Ayodhya and the Rama temple Movement*, New Delhi: Bharatiya Janata Party.
- Andersen, W.K. and S.D. Damle 2018, *The RSS, a view to inside*, Gurgaon: Penguin Random House India.
- Bharatiya Jana Sangh (c)1965, *Principles and Policy*, New Delhi: Bharatiya Jana Sangh.
- \_\_\_\_\_ 1973, *Bharatiya Jana Sangh Party Documents, Vol. I*, New Delhi, Bharatiya Jana Sangh
- Chatterji, Prashanto Kumar 2015, *Shyama Prasad Mookerjee and Indian politics*, New Delhi: Cambridge University Press India/
- Choudhury, Chandras 2015, "The Campaign to glorify Gandhi's assassin," *Japan Times*, 13 Jan.

- Chopra, Surabhi and Prita Jha (eds.) 2014, *On their watch, mass violence and state apathy in India*, Gurgaon: Three Essays collective.
- Farasat, Warisha and Prita Jha 2016, *Splintered Justice, Living the horror of mass communal violence in Bhagalpur and Gujarat*, Gurgaon: Three Essays Collective/
- Godbole, Madhav 1996, *Unfinished Innings, Recollection and Reflections of Civil Servant*, Hyderabad: Orient Longman.
- Golwalkar, M. S. 2000 [1966], *Bunch of Thoughts*, Bangalore: Sahitya Sindhu Prakashana.
- Goyal, D. R. 2000 [1979], *Rashtriya Swayamsewak Sangh*, New Delhi: Radhakrishna.
- Guha, Ramachandra 2015, “Bhagwat’s Ambedkar,” *IE*, 10 Dec.
- \_\_\_\_\_ 2017, “Indira Gandhi to Modi,” *IE*, 18 Nov.
- Jaffrelot, C 2017., “Populism, remixed,” *IE*, 24 March.
- Kasbe, Raosaheb 2019, *Decoding the RSS, its tradition and politics*, New Delhi: LeftWord Books.
- Kelkar, B. K. 1991, *Pandit Deendayal Upadhyaya, Ideology and Perception Part III Political Thought*, New Delhi: Suruchi Prakashan.
- Kelkar, Sanjeev 2011, *Lost Years of RSS*, New Delhi: Sage Publications.
- Madhok, Balraj c. 1954, *Dr. Syama Prasad Mookerjee, a biography*, New Delhi: Deepak Prakashan.
- Malhotra, Inder 2014, “With Godse at the centre,” *IE*, 31 Dec.
- Nene, V. V. 1991, *Pandit Deendayal Upadhyaya, Ideology and Perception Part II Integral Humanism*, New Delhi: Suruchi Prakashan.
- Noorani, A. G. 2000, *The RSS and the BJP, a division of labour*, New Delhi: LeftWord.
- \_\_\_\_\_ 2002, *Savarkar and Hindutva, the Godse connection*, New Delhi: LeftWord.
- Pal, Pratapaditya 2016, “A ‘Mahabharata’ of a History of Ancient India,” *Indian Historical Review*, Vol.43, No. 2, pp.316-325.
- Palshikar, Suhas 2014a, “By converting Hindus to Hindutva,” *IE*, 18 Sept.
- \_\_\_\_\_ 2014b, “Cleansing Gandhi of radicalism,” *IE*, 7 Oct.
- Panikkar, K. N. 2009, “Culture and communalism,” in SAHMAT, *After Ayodhya, reclaiming the secular*, New Delhi: SAHMAT.
- Rama Jois, M. 1996, *Supreme Court Judgment of “Hindutva” an Important Land Mark*, New Delhi: Suruchi Prakashan.
- Savarkar, V.D. 2003 [1923], *Hindutva, who is a Hindu?*, New Delhi: Hindi Sahitya Sadan.
- Sen, Ronojoy 2010, *Articles of Faith, Religion, Secularism and the Indian Supreme Court*, New Delhi: Oxford University Press.
- Suruchi Prakashan 1996, *Sarvoccha Nyayalaya ka aitihāsik nirnaya, ‘Hindutva’ ek jivan-paddhati*, New Delhi: Suruchi Prakashan

湊一樹編『インドのポピュリズム モーデー政権下の「世界最大の民主主義」』調査研究  
報告書 アジア経済研究所 2021年

Tillin, Louise 2016, “The centralizing instinct,” *The Hindu*, 28 Nov.